

■倉俣史朗 世界的に傑出した仕事をしたインテリアデザイナー。あまりの独創性ゆえ「クラマタ・ショック」という言葉まで。

くらまたしろう

帝人疑獄事件1934=

東京本郷にあった理化学研究所の社宅で、倉俣吉治・清の四男に生まれる。

理化学研究所の敷地には、いろいろな建築・工場・建材置場がある、子どもには絶好の遊び場で、とくに洋風建築が原風景になり、仕事をしていて大工の棟梁に憧れ、いわゆる青図の設計図に魅了され、

日中戦争始・1937= 4歳:

日米開戦・1941= 7歳: 昭和国家小学校に入学。

創価学会検挙1943= 9歳: 静岡県沼津市の知人宅に疎開し、愛鷹村小学校に転入。

敗戦・1945=11歳: 東京の家が空襲で焼ける。敗戦後、家族と合流のため神奈川県横浜市に移る。鐵小学校へ転入。後年、空襲時に米軍機が電波妨害のためのアルミチップを落とし、キラキラしてきれいだったと語り、

新憲法公布・1946=12歳: 子供の頃のことを後々まで鮮明に記憶していて、晩年になっても、僕は12歳のままで、やっていることに懐疑的で矛盾も多いが、つくってみたい衝動の方が強いと語るのである。

新憲法施行・1947=13歳: 東京に戻り、文京区第九中学校に入学。時間を止めたような焼け跡が第二の原風景になる。

朝鮮戦争始・1950=16歳: 東京都立工芸高等学校木材科入学。

独立回復・1951=17歳:

メデー事件・1952=18歳:

テレビ放送始・1953=19歳: 東京都立工芸高等学校木材科卒業。写真大学を受験するも、その後浪人。

自衛隊発足・1954=20歳: 帝国器材家具工場に入社するが、

55年体制始・1955=21歳: 退社し、創設2年目の桑沢デザイン研究所のリビングデザイン科に入学。塾的雰囲気なか、小原会館での第1回{具体美術協会}展を見て衝撃を受けたりして、デザインエージへの胎動を感じる。

国連加盟・1956=22歳: {ドムス}誌のイタリアデザインに衝撃を受け、同誌に掲載されるようなデザインをしようと思うようになって、卒業。父が株式会社三愛社長の市村清と知り合ったことが縁と、銀座4丁目に建てられる円筒型ビル{三愛ドリームセンター}のインテリアデザインがしてみたいと、

なべ底不況・1957=23歳: 三愛宣伝課に入社。店舗設計、ショーケース、ウインドウディスプレイなどするうち、ビルの設計者、日建設計の林昌二と知り合う。これら個別のものをインテリアによって統合するデザイナーとして、

安保闘争・1960=26歳:

タイタイ病始・1961=27歳:

東京リビック1964=30歳: {室内}で桑沢洋子から推薦されるまでになって、退社、松屋インテリアデザイン室嘱託になり、

大学紛争始・1965=31歳: \*家具デザインを学んで退職すると、{クラマタデザイン事務所}設立。

いざなぎ景気1966=32歳: 彫刻家三木富雄、田中信太郎と出会い、同年松屋で開催された{空間から環境へ}展と合わせて、大きな刺激を受け、前衛アートに関心を持つようになり、紳士服メーカーエドワーズ社長倉橋から勧められ、独立後の最初の仕事は「エドワーズのショールーム」、

美濃部都知事1967=33歳: 前衛美術家高松次郎やグラフィックデザイナー横尾忠則とコラボした内装など、先端的芸術家との協業で広く知られ、時代の寵児ようになっていく。

霞ヶ関ビル・1968=34歳: 「ピラミッドの家具」「スプリングの椅子」、

全共闘ビーク・1969=35歳: 美術出版社{デザイン}の「倉俣史朗の世界」で、山口勝弘は、彼が「誰よりもマルセル・デュシャンの核心を掴んでいた」と指摘。「クラブジャッド」。自らの作品を持って、イタリアの{ドムス}誌を訪れ、後にその時の作品が{ドムス}に掲載される。15名の若手クリエイターでデザイン集団{サイレンサー}結成。

大阪万博・1970=36歳: メンズショップ{マーケットワン}のファサードにFRPを用いて、公害問題になり撤去。日本万国博覧会に参加するとともに、この前後、「光の椅子」「壁の椅子」「硝子の椅子」、シリーズ「変形の家具」「引出しの家具」、

「廻りキャビネット」など収納家具を多く発表し、

「建築雑誌(SD)に、哲学者多木浩二が「合理的制度へのアイロニー」を寄稿したことで、無意識に行っていた」ことばのない思考が言語化され、のちに、「言語化された自分から逃れるのに数年かかった」と回想。

日中国交回復1972=38歳: 林が設計したパレスサイドビルの「ソラリス」、 「ランプ・オブQ」。'商店建築における一連の家具とディスプレイ'に対して、第18回毎日産業デザイン賞。

石油ショック1973=39歳: 過労のため眼を患い、夏期、スイス・チューリッヒに滞在。

角栄金脈辞任1974=40歳: 子供の教科書が家永裁判になったことから政治に興味を持ち、ある会で知り合った黒田征太郎の関係で、かねて共感する自称「焼け跡闇市派」の作家野坂昭如が参院選に出馬した際、運動員の一人として参加。

田中角栄逮捕1976=42歳: 著書「倉俣史朗の仕事」出版。この年の{インテリア}で、自身が落語好きだったことから、「三題噺に喩えれば、抽斗(引出し)・時計・階段が、自分のなかに、時間を接点として存在している」という。

JALハイジャック・1977=43歳: 東野芳明がキュレーターを務めた西部美術館での現代美術家6人展に、デザイナーとして唯一人選ばれ、映画「惑星ソラリス」から連想した抽斗「ソラリス」、 「硝子の棚」「硝子の椅子」、機能を持たない「記憶の手術台」を出品、展覧会図録に詳細に記す、子供時代の「匂い」の記憶ははじめ、五感の記憶の再生が制作の原点。

革新大敗北・1979=45歳:

「インペリアル」。'家具からインテリアまで、現代社会における物と人間との実利的な関係から開放された独自の世界をデザイン界に提示するに至った一連の制作活動に対して'第2回日本文化デザイン賞。エットレ・ソットサスからスケッチ2枚だけの手紙で誘われ革命的デザイン運動{メンフィス}に参加、デザインの枠から解放され、80年代の内外の建築家に大きな影響を与えていく。

中曽根内閣・1982=48歳:

角栄実刑判決1983=49歳: 北イタリア、南仏、パリを旅行。

1984=50歳: 工場で大量に出る屑ガラスを人工大理石に混ぜ「スターピース」という素材を作ったように、信頼できる素材加工のプロ達(施工会社イシマルの石丸隆夫や三保谷硝子店三代目の三保谷友彦)との信頼関係は熱いものであった。この間、新設計のコイルが無い「倉又風呂」を設計するが、全く売れずすぐに廃品になった。

ジャンボ機墜落1985=51歳: 「トワイライトタイム」「シング・シング・シング」をはじめ、ユニークな家具の名前は、好きだったジャズなどにちなんだものが多い。ヨーゼフ・ホフマンへのオマージュ椅子にスチールワイヤーを巻きつけ燃やし、ワイヤーのみを残したという衝撃の作品「ピギン・ザ・ピギン」など、優れた家具デザインはいずれも機能的ではなく、あくまで自らの美学と感性を表現したもので、のちに、小池一子言うように、デザイナーというよりコンセプチュアルアーティストであったとも言え、デザインとは何か考えさせられる。

バブル始・1986=52歳: エキスパンダメタルを内装や家具に全面的に使った「ハウ・ハイ・ザ・ムーン」など傑作を生む。

竹下内閣・1987=53歳: 「マジカルな傑作『傘立て』。早くから光をテーマにした什器や壁、天井をデザインしてきたが、「カフェ OXC Y」では、光の空間に至る。

リルト事件・1988=54歳: 磯崎新、エットレ・ソットサスが参加した著書「倉俣史朗1967~1987」出版。\*この年デザインした鮎屋「きよ友」は、没後、経営難で閉鎖されるが、そのままの形で、香港の美術館M+の「Kiyotomo Sushi Bar」として収蔵される。代表作になる「ミス・ブランチ」は、アクリルのなかに造花の薔薇を封印したもので、「なぜ薔薇なのかは分からないが造花でなければならない」と、死を覚悟していたようにも見える。実際、ほとんど手作りに近く高価だった事もあり56脚しか作られなかったが、その数は彼の享年になったのである。また、彼の言う「装飾は機能を持っている」ことを証明したモダニズム批判でもあったが、これも、没後、富山県美術館に収蔵されるように、インテリアデザインが芸術文化財になっていく嚆矢になるのである。

昭和天皇没・1989=55歳: 「ブルーシャンパン」「カピネドキュリオジテ」。パリで個展「倉俣史朗」を開き、

ドイツ統一・1990=56歳: 日本固有の文化や美意識を感じる独自のデザインによって、フランス文化省芸術文化勲章。

ソ連崩壊・1991=57歳: 「ラピュタ」を最後に、急性心不全のため、没した。

直後に「未現像の風景」が出版され、遺書のようにだったが、その生涯と作品のすべてを、未亡人美恵子がデザイナー遺産として保全管理し、現在もおお、影響を及ぼし続けている。50を過ぎてから授かったダウン症娘を溺愛、原因不明の病に倒れたこともあって、精神的に辛い時期だったようだ。